

五 佐和子のシュークリーム

キャンプが終わってからというもの、健二は、もの足りない毎日を送っていた。

一学期の間は、あんなに、夏休みを心待ちにしていたはずなのに、実際に休みに入ってしまうと、騒がしいクラスメイトたちに会えないこともあつてか、なんとなくさみしくなる。

もちろん、一馬とは、一日も欠かすことなく、野球の練習に打ちこんでいるが、それでも、心のどこかにぽっかりと穴が開いているようになってるのは、ほかに原因があるためかもしれない。

そう、近ごろ、美雪とまったく顔をあわせなくなった。

幼なじみで同じけやき通りに住んでいる若菜や弘樹たちとは、家族ぐるみで海や川に行ったり、となりの米倉市で行われる花火大会に出かけたりと、学校がなくても会う機会が多いのだが、美雪とは、住んでいる町内もちがうために、接点が何もないのだ。

もちろん、健二は、美雪に会いたいなど思っているわけではない。

なのに、美雪がいないと、ケンカ相手にこまるというか、怒りを燃え立たせてくれるものがないというか、とにかく、毎日に刺激がないのだ。

一馬にそのことを言うと、「そいつは、恋だな」と大笑いされた。

「冗談もいいかげんにしろ！」

思いきりつかみかかったものの、うだるような夏の暑さに、ケンカをする気にもなれな

い。

(恋っていうのはなあ・・・！)

健二は、思うのだった。

(恋っていうのは、秀兄ちゃんみたいなのを言うんだ)

健二の姉、佐和子に会うために、ナイトウ洋菓子店にやってくる高田秀一。

作蔵に何度も追いつ返されながら、それでも、秀一は、何かとナイトウ洋菓子店に顔を出す。その根性は、たいしたものだ。

健二には、恋というものが、まだよくわからないが、もし、自分が恋をしたら、秀一のようにできるだろうかと思ってしまう。

その秀一は、昨日の午後、健二の部屋にいた。作蔵が、老人会の旅行に一泊で出かけてしまったので、健二が、宿題を教えようという名目のもとに呼び寄せたのだ。

健二は、秀一のことばかりではない。実は、作蔵以外のみんなは、秀一が家に来るのを歓迎している。

秀一は、大学に入る時に親もとを離れて、米倉市でアパート暮らしをしている。おっとりとしてやさしくて、礼儀正しい秀一は、義男からも鈴子からも、なかなかのお気に入りである。

佐和子自身がどう思っているかは、今のところはっきりしないが、こうして自宅に来られるのをいやがらないところを見れば、まんざらでもないのかもしれない。

健二は、勉強を教えてもらいながら、時々、秀一が脱線してする話が好きだった。

秀一は、佐和子と同じ理工学部だったから、理科の話、とりわけ、宇宙とか星の話が得意である。

大学を卒業したら、コンピュータエンジニアか教師になりたいらしく、健二は、もし秀一が教師になったら、授業を受けてみたいと思っていた。

それにしても、大学の夏休みというのは、小学校の夏休みよりもずっと長く、秀一を見ていると、ずいぶんひまそうである。

佐和子の方は、同じ大学の、しかも、同じクラスに通っているはずなのに、講義がない時は、家で店の手伝いをしてることが多かったから、時間をもてあましていることなど、まったくくない。今も、新作のお菓子を考案すると言って、店の調理場にこもっている。

「はあ、君の姉さんはいいなあ。あんなに、きれいで頭がよくて。ぼくとは、大ちがいさ」

秀一は、健二の宿題が一息ついたところで、何を思ったか、急にそんなことを言いはじめた。

最近、ため息をついていることが、前よりも多くなったような気がする。こんな太陽が高く輝く季節に、どうして、ため息ばかりつくのかと、健二は不思議に思う。

「秀兄ちゃんを見ていると、元気なのか、元気じゃないのか、わからなくなってくるよ」

「へっ、なんで？」

「だってさ、うちに来る時は、ニコニコとうれしそうなのに、おれという時は、ため息ば

っかりついているじゃないか」

健二から指摘されると、秀一は、「ああ」とうなずいて、

「それはね、恋だよ」

とぬけぬけと言った。

「恋？」

「そう、恋。健二くんは、恋をしていないのかい？」

秀一は、健二の顔をのぞきこむようにして問いかけてきた。

「そんなもん、するわけないじゃんか」

「そうかなあ？ぼくが小六の時には、好きな子がいたけどなあ」

「へえ」

「みんな、恥ずかしがって口には出さないけど、同じクラスの男子は、だいたい、だれかのことが好きだったと思うよ。健二くんのクラスメイトだって、本当は、そうなんじゃないのかい？」

健二は、クラスの男子の顔を頭に思い浮かべた。

自分と同じで、野球にしか興味のない一馬。学級委員長として、がんばればがんばるほど、空まわりばかりしている弘樹。それに、食べることしか頭がない満久など……。

「ないない。ぜったいない！」

健二は、首を横にふって大笑いした。

あの連中に、恋なんて言葉は、似あわない。同時に自分にだって、そんな言葉は、無関係だ。

「ちょっと、いい？」

二人で話しこんでいる時に、部屋の外から佐和子の声が聞こえた。とたんに、秀一が目
が輝きだす。

秀一がいる時に、佐和子が健二の部屋にやってくるのは、めずらしいことだ。何事かと、
健二が部屋のドアを開けると、佐和子の手にしたおぼんには、二つのシュークリームとジ
ュースが乗っていた。

「勉強中にごめんなさい。おやつがわりに試食してもらいたくて」

「シュークリームじゃん、ラッキー！」

「ちょっと、入らせてね」

佐和子はそう言うと、ニコニコしながら、健二と秀一の前にシュークリームとジュース
をならべていった。

見た目は、ごくふつうのシュークリームだったが、生地の切れ目からあふれ出している
生クリームが、ふんわりとつややかで、いかにもうまそうだ。

「わあ、これ、内藤さんが作ったの？」

「趣味みたいなものだけだね。高田くん、正直な感想を聞かせてくれる？」

「聞かせます、聞かせます。内藤さんなら、なんでもありのままに話します！」

佐和子の差し入れに大感激の秀一は、調子に乗ってシュークリームにぱくついた。健二も、ぱくついた。

二人して、しばらく口をもぐもぐさせながら、もう何も言うことはない。うますぎると思っただ。

「すごい、うますぎる！」

秀一は、本当に思ったことをそのままの言葉で言った。佐和子が、こまったような笑みを浮かべる。

「ありがとう。でも、そうじゃなくて、細かな感想を教えてもらいたい。何か足りないとか、もっと、こうした方がいいとか」

「もしかして、これ、試作品？」

「そう、お店に出す新商品にしたいの」

佐和子の考案したシュークリームとあって、秀一は、ますます大はりきりだ。

「このシュークリームに、うまい以外の感想なんてあるのか？」

健二は首をかしげたが、秀一は真顔になった。

シュークリームの中には、メープル風味の生クリームが入っている。クリームを包む生地にも、ほんのりとブランデーの味がしみこんでいて、最強の組みあわせと言うほかはない。

「うーん、そうだなあ。充分においしいけど、何か足りないと言われれば、そうかもし

れない」

「やっぱり、そう思う？何が足りないのか、わからなくて」

佐和子は、若い人に食べさせるには、このままでいいが、年配者には、味がくどいのではないかと言った。

中のクリームから余計なものを取り除いて、生クリーム本来の味にすると、どこにでもある、あたりまえのシュークリームになってしまう。あと少しだけ、味をまろやかに飾りつけする何か、このシュークリームには必要なのだ。

「ようし、それなら、ぼくが、かくし味になるようなものを見つけてくるよ」

「本当に？高田くん、お菓子作りやったことあるの？」

「えっ、それは、ないんだけど。でも、ただの素人の方が、どんなものがおいしいか、わかるかもしれないよ」

それは、無理だろうと健二は思ったが、秀一の上気した顔を見ると、横やりを入れる気にはなれなかった。

秀一は、本当に佐和子のが好きなのだ。佐和子のためなら、不得意なお菓子作りまで一生懸命にやろうとする。

佐和子と話している時の秀一は、心の底から楽しそうで、見ているだけで、こちらまでうれしくなってくる。

もっとも、うれしくなるのは、秀一なら、自分の自慢の姉の相手にふさわしいのではな

いかという思いが、健二の中にあるためかもしれない。

「秀兄ちゃんは、直球派だよな。どうして、そんなに、自分の気持ちをストレートに出せるんだ？」

佐和子が部屋から出て行ったあと、健二は、小声で秀一にたずねてみた。

「ぼく、何か変なこと言ったかな？」

「いや、言ってないよ。でも、秀兄ちゃんが、おれの姉ちゃんのこと好きなのは、よくわかる」

健二がズバリ答えると、秀一は、できそこないの赤鬼のように、たちまち顔を赤くした。

「君の方が、ずっと直球でものを言う気がするけど・・・」

そう言いながら、秀一はうれしいらしい。佐和子の家族に自分の気持ちをわかってもらえるのは、うれしいことだ。

「佐和子さんも、気づいているのかな？」

「そりゃあ、決まってるよ。おれでさえ、気づくんだから」

「うはあっ！」

秀一は、赤い顔をますます赤くして、すわっていたざぶとんに顔をうずめてしまった。

「そうかあ、佐和子さんも気づいてくれてるのかあ。いや、まいったなあ・・・」

本人の前では、「内藤さん」と名字で呼んでいたくせに、いつの間にか、「佐和子さん」

と名前になっていることを、秀一は、自覚しているのだろうか？

ひとりでのろけている秀一にあきれながら、健二は、もう一度たずねた。

「どうして、姉ちゃんに真正面からアタックできるんだ？こわくないのか？断られるかもしれないんだぜ」

秀一は、ざぶとんから顔を離して身をおこした。その表情は、いたってまじめだった。

「どうしてかな？ぼくは、もともと引っこみ思案な性格なんだけどな。自分を大切にしようと思っているからかな？」

「自分を？」

「そう。ぎざな言い方かもしれないけど、自分を卑下するのは、よくないと思うんだ。ぼくは、平凡な人間だから、せめて、自分で自分をはげまさないかね。だから、毎朝、鏡の前で自分に言い聞かせる。今日こそ、佐和子さんをふり向かせてみせるぞ！ってね」

秀一は、そこまで言う、「うわあつ、自分で自分の言葉が恥ずかしい！」ときけんで、また、ざぶとんに突っ伏してしまった。

見ている健二は、思わず吹き出しそうになる。

「・・・ただね、今じゃないと、できないことってあると思うんだ。あとになってから、あの時、こうしていればよかったって後悔しても、もう、遅いからね」

秀一は、ざぶとんで声をこもらせながら、そう続けた。

健二には、秀一の気持ちは、いまひとつわかりかねたが、最後の言葉には、引っかかるものがあった。

今でなければ、できないことがある。あとから後悔しても遅い……。

「ふうん……」

健二は、何を思ったか、部屋のすみにあるグラブに手を伸ばした。

たつぷりと使いこんである、少しよれよれのグラブ。野球に関してだけは、悔いを残し
たくないという気持ちはある。

でも、ほかのことではどうだろう？

ほかのことでも、野球のように、執念を燃やすことができるだろうか？

健二には、どうも自信がない。とくに秀一の言う「恋」については、ほとんど何もでき
ないにちがいがなかった。

×

×

×

ツクツクボウシが盛大に鳴きはじめるころになると、空高くいわし雲が見られるように
なった。

まだまだ、残暑はきびしかったが、朝晩には、秋の訪れを告げるすずしい風が、ほんの
少しだけ感じ取れる瞬間がある。

二期期の初日、教室にやってきたクラスメイトたちは、まっ黒に日焼けをして、どの顔
も元気そうだった。

美雪のまわりには、さっそく、いつもの女子の取り巻きがきている。

女子の人気は、今も、美雪と若菜に集中していたが、久しぶりに見る美雪は、若菜よりも、顔色が白くやつれて見えた。

美雪は、登校してきた健二に気がつくと、クラスメイトとの話を切り上げて、そばまでやってきた。

「久しぶり。ケガは、もう治った？」

「おお、とつくだぜ。あんなもの、ケガの内に入らねえよ」

「よかった。傷が残ったら、どうしようって思ってたから」

美雪は、それだけ言うと、また、取り巻きのところへ戻っていった。

今度は、若菜がやってくる。

「どうしたの？」

「ケガは、だいじょうぶかだつてさ。あんなパンチ、どうってことねえのにさ」

「ふうん・・・」

若菜は、何か考えるような目で美雪をながめている。それから、急に話を変えた。

「今度、商店街で秋祭りやるよね。わたし、福引のマスコットガールになるかもしれないんだ」

「へえ、おまえが？マスコットボーイのまちがいだろ？」

とたんに、目から火が出るような若菜のパンチが、健二の脳天を直撃した。

「だれが、マスコットボーイよ！ガールに決まってんでしょ！」

「痛ってえなあ。おまえのパンチの方が、よっぽど効くよ」

若菜は、健二のその言葉を聞くと、急いで手を引っこめた。

美雪が健二のケガを心配していたのにくらべ、自分の行為が恥ずかしくなってしまうたのかもしれない。

「ごめん。痛すぎた？」

「なんだよ？急にしおらしくなって」

「……」

若菜は、顔を赤くしている。

「べ、別にイ。とにかくウ、わたしも、マスコットとして認められたってこと！やってみたかったんだよね、あれ。ほら、佐和子さんが何回もやってるじゃない？」

けやき通り商店街では、毎年、九月の中旬に秋祭りを行なっている。

小さな子供たちが、ダンボールで作ったおみこしを担いだり、道を歩行者天国にして、組合で出店をかまえたり、この時ばかりは、けやき通り商店街にかつての活気が戻ってくる。

たしかに、佐和子は、小学生のころから、秋祭りの福引マスコットガールを何度もやってきた。佐和子を崇拜している若菜がはしゃぐのも、当然のことかもしれない。

しかし、今年の秋祭りは、どうも様子がおかしかった。

センチュリーWADAの出店問題によって、一時は、秋祭り自体が行なわれるのか、あ

やしくなっていたのだ。

八月に入ると、和田コーポレーションは、地元商店を通常よりも好待遇でテナントとして受け入れることを、正式に発表した。

これにより、統率のとれていなかった駅前通り商店街からは、和田コーポレーションとのテナント契約に走る店舗が、続出している。

この一大事に、秋祭りなど、やっつけていいのか？

そんな声が、けやき通り商店街のあちらこちらで、ささやかれるようになったのも、無理はなかった。

けれども、センチュリーWADAの出店と秋祭りに関係はない。むしろ、こんな時だからこそ、盛大に秋祭りをやって、わたしたちの商店街に活気を取り戻すべきだ。

ある日の組合の会合で、そう反論したのは、なんと、健二の母の鈴子だった。

この日、いつも会合に出ている作蔵が、体の不調を訴えたため、組合の会合には、かわりに鈴子が出席していた。

鈴子は、集まってきたけやき通り商店街の店主たちを前に、堂々と言った。

「明るい話題がひとつもない今だからこそ、秋祭りをやるべきではないでしょうか？和田コーポレーションの動向に、いちいちふりまわされて、やるべきこともできないようになってしまったら、戦う前にこちらが負けです」

秋祭りは、どの店舗にとっても、大切なかき入れ時である。だれも、反論を唱える者は、

いなかった。

結局、鈴子の意見に動かされた、けやき通り商店街組合は、例年どおり、秋祭りを開催することになった。

だが、それでも、かげで不服を唱える者はいる。秋祭りひとつをめぐっても、意見が分かれてしまうくらい、今のけやき通り商店街の結束力は、弱まってきているのだった。

作蔵は、嫁である鈴子が、組合で自らの信念を貫いたことに、かなり満足しているようだった。

そもそも、その場に作蔵がいたら、秋祭りをやめようなどという意見は出なかったはずだ。

だが、近ごろの作蔵は、体調もいまひとつで、ひとりりで何かを考えていることが多くなった。あの藤村和助が、ナイトウ洋菓子店にやってきた日から、ずっとである。

健二の目から見て、心なしか、以前より勢いがなくなったようにも見える。

その作蔵が、ある日の夕方、とつぜん、健二に言った。

「おい、健二。わしとキャッチボールをやるか」

作蔵が、健二をキャッチボールに誘うのは、久しぶりである。

「いいよ。どこでやる？」

「淀川の河川敷だ。散歩がてら、出かけるぞ」

健二は、不思議に思った。キャッチボールなら、淀浜公園で十分なのに、と首をかしげ

た。

淀浜公園は、かつて、和田コーポレーションへの抗議集会を開いた場所である。あそこなら、淀川の河川敷よりずっと広くて、ボールが川に流れる心配もない。

だが、作蔵は、どうしても、淀川の河川敷に行きたいようだった。

淀川は、大河内町となりの米倉市を隔てる、二級河川である。川幅も、それほど広くなく、河川敷と言っても、野球の試合ができるようなものではない。

けやき通りから海岸通りへ出て歩いていくと、やがて淀浜公園にたどり着き、それから、西団地のそばを通る。

西団地は、高度成長期のころに建てられた古い団地で、その外れは、淀川に面している。かつては、おばけ工場や工業団地で働く、若い家族でにぎわっていた西団地も、今では、その半分近くが空き家になっていた。

「よし、健二、行くぞ」

堤防の急な階段を下りた場所で、健二と作蔵は、キャッチボールをはじめた。

一年ほど前までは、作蔵に向かって全力で投げることができた健二も、今では、そういうわけにはいかない。

中学へ入ったら、キャッチボールそのものが、できなくなってしまうかもしれない。

「おまえ、ずいぶん力が強くなったな。毎日、筋トレやってるのか？」

「あたりまえだろ。それに、もう、おれ六年生だぜ」

「そうか、頼もしいことを言ってくれるじゃないか。わしは、おまえが甲子園に出るまでは、死なないからな」

作蔵の口から「甲子園」という言葉が出たのを聞いて、健二は、ハッとした。

ふだんの作蔵は、なぜか、甲子園の話をしたがらない。甲子園まで、あとわずかというところで逃したくやしきからなのか、それとも、ほかに理由があるのか。

とにかく、作蔵は、今、はっきりと「甲子園」を口にした。

健二は、答えた。

「そうかたんに、行けるはずないだろ。中学、高校と進めば、野球のうまいやつは、いくらでもいるよ」

「そうだなあ。一馬のやつとバッテリーが組めるのも、今のうちかもしれんなあ・・・」

作蔵は、かるくため息をついた。

一馬とバッテリーが組めなくなる？

健二は、今まで、そういうことを真剣に考えたことがなかった。けれども、それは、十分にありえることだ。

一馬は、キャッチャーとして最高の男だと、健二は思っている。中学へ行き、自分より実力のあるピッチャーが現れたとしたら、一馬は、そいつとバッテリーを組まされるようになるだろう。

「それにな、高校へ行ったら、もしかすると、おたがい敵同士になるかもしれんぞ」

「いやなこと言うなよ、じいちゃん。まだ、先の話だぜ」

「ああ、そうだな。今が、いちばんいいかもな。純粋に野球を楽しんでいられる、今だけがな」

今日の作蔵は、どうかしていると、健二は思った。

作蔵は、キャッチボールをしながら、語り出した。

「ここは、わしが子供のころ、よくキャッチボールをやった場所だ。ここだと、ちょっと、手もとが狂っただけで、ボールが川に流れていつちまうだろう？だから、キャッチボールをやるだけでも、真剣にならざるをえなかった。ここで、こうしておまえ相手にボールを投げとると、当時のことを思い出すわい」

「まだ、淀浜公園がなかったんだ？」

「あんなものができたのは、ずっとあとになってからのことだ。わしらのころは、満足な練習場所もなかった。いつも、広い空き地でボールを追いかけていたもんだ。いつか、甲子園に行こうってな。本気でそれを信じとった」

「……」

作蔵は、手にしたボールをじっと見つめた。

「ボールの感触が、手のひらになじまなくなつとる。歳をとつちまったもんだ」

そう言って、健二に投げ返した。

「だが、甲子園は遠かった。わしは、旧制中学の三年の夏に、それを、体中で実感したよ」

「でも、県大会で決勝まで行ったんだろ。あと一步だったじゃんか」

「その一步が、とてつもなく遠いのよ。何事もそうだ。とくにスポーツの世界では、頭ひとつどころか、髪の毛一本分抜け出すために、途方もない練習をつまなきやならん」

健二は、うなずいた。

どんなに練習をしたつもりになっても、勝たなければ意味がない。負けるということは、結局、それまでの練習を無にしたも同じなのだ。

「しかしな、どんなに練習を積んだとしても、負けることがある。野球は、チームで戦うものだ。おまえひとりがどんなに強くなったとしても、それだけで、チーム全体を勝たせることはできん」

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ？」

「それを自分で考えるんだ。わしには、最後まで、それがわからなかった。だから負けたのよ」

作蔵は、そう言ってニヤリと笑った。だが、その笑いには、いつものようなふてぶてしさはなく、どこかさみしく悲しげに見えた。

「今回の反対運動も、そこがわからなければ、失敗するじゃろうな。仮に、わしらに大金があつて、おばけ工場を全部買い取ったとしても、連盟のみんなが喜ぶわけじゃない。セブンチュリーWADAにテナントとして入りたいと思つとる者は、けやき通りにもいる。みんな、口に出さなだけじゃ」

健二は、作蔵の言葉を意外に思った。

作蔵は、現実をちゃんとふまえているのだ。ただ、やみくもに、センチュリーWADAの出店に反対を唱えているわけではない。

けれども、そうであるならば、作蔵は、これからの連盟の活動をどのようなものにした
いと考えているのだろうか？

はたして、作蔵たちの戦いに勝ち目はあるのだろうか？

健二が、ふと顔を上げると、土手の上を歩く人影が目に入った。その人影の背中の方
うに、西団地が夕日を浴びている。

「美雪・・・？」

健二は、ドキリとした。

人影は、まちがいなく美雪である。会いたいと思っていたわけでもないのに、どうして、
こんなに胸が騒ぐのか。

美雪は、白いスーパールの買い物用の袋を手にはぎ、前かがみで歩いていく。

そう言えば、美雪は、西団地に住んでいるそうだと、だれかが話していたのを聞いたこ
とがあった。

父親が、和田コーポレーションの幹部である美雪のことだから、どこかの豪邸にでも住
んでいるのだろうと考えていた健二にしてみれば、それは、意外な事実だった。

学校にいる時の強気な態度とはちがって、少し背中をまるめた美雪は、どこか頼りなく

小さく見える。

(あいつ、いつも、買い物なんかして帰るのか？おふくろがいるだろうに・・・)

健二は、美雪のうしろ姿に、そんな思いをめぐらせていたが、急に感電したかのように息をのんだ。キャンプ初日に遅刻してきた、美雪の様子を思い出したのだ。

あの時に感じた違和感の理由が、今になって、ようやくわかった。

そう、美雪には、母親の存在が見えないのだ。父親と二人で、岡村先生に頭を下げている美雪には、彼女をあと押しする、母性の力が感じ取れなかった。

母親がいれば、したくに手間取ることはなかった。

母親がいれば、もっと早くにおきていたかもしれない。

そんな、ぼんやりとした思いが、自分でも気づかないうちに、健二をとまどわせていたのだ。

(ふんっ、あいつの家の事情なんて、知るかよ)

キャッチボールをする健二の腕に力がこもったが、それに反して、球は、ゆるい弧を描いた。「ボールが死んでいるぞ！」と、作蔵が怒鳴る。

健二は、落ち着かなかった。美雪を呼び止めたい気持ちがありながら、それを認めることはできなかった。

美雪は、団地の中へと姿を消していった。とうとう、健二には、気づかないままだった。